

第 15 回県西地域活性化推進協議会 結果概要

(R5. 3. 17 13:30~15:00 小田原合同庁舎)

○ 開会

○ 知事あいさつ

黒岩知事

本日は大変お忙しい中、県西地域活性化推進協議会にお集まりいただき、誠にありがとうございます。

本日は、実に4年ぶりの対面での開催となる。こうして県西地域で多くの皆様と直接お会いして協議会を開催できることを、大変嬉しく思っている。新型コロナウイルス感染症について、国は、5月8日から感染症法上の位置付けを、「2類相当」から、季節性インフルエンザと同じ「5類」に変更することを決定した。

今後は、新型コロナとの「共存」を前提とした感染症対策を行いながら、県としてもこれを機に、さらに人を呼び込みたいと考えている。

さて、令和3年3月に「県西地域活性化プロジェクト」を改定してから2年が経過し、いよいよプロジェクトの最終年を迎える。これまで、県をはじめ、市町や民間が連携し、平成26年から未病の改善をキーワードに「県西地域活性化プロジェクト」を進めた結果、地域全体に未病の考え方が広く浸透し、未病コンセプトを生かした取組も数多く生まれてきた。

そこで、令和3年のプロジェクトの改定では、未病改善の普及啓発から、実践を進める段階にステージを上げ、取組を行うこととしたほか、コロナ禍をきっかけにした社会環境の変化を踏まえ、関係人口の創出や、移住・定住の促進に積極的に取り組むこととした。

県では今年度、未病改善の実践を体験できる講座や、複数の市町をめぐる広域ワーケーション、「体験」による未病改善をテーマとした誘客キャンペーンを行うなど、新たな取組も進めてきた。

また、未病に関連した取組として、11月に箱根町で「ME-BYOサミット神奈川2022」を開催し、地域の抱える健康問題などについて議論を行ったほか、県内各地で「ねんりんピックかながわ2022」を開催し、未病改善の取組を全国に発信することができた。

さらに、来月には、プロジェクトの象徴でもある未病バレー「ビオトピア」がオープン5周年を迎えるということで、県西地域がさらに盛り上がっていくことを期待している。

本日は、これまでの取組状況について、委員の皆様からご報告いただくとともに、プロジェクトのこれまでの成果について振り返りを行う。

また、令和6年度以降の対応に向けて、県西地域が目指すべき将来像についても、委員の皆様からご説明をいただけるということで、協議会でそれらの内容を共有し、意見を交換していきたい。限られた時間ではあるが、プロジェクトの今後の展開に向けて、忌憚のない議論をお願いしたい。

○ 議題

(1) 令和4年度の県西地域活性化プロジェクトの取組状況について

(2) 令和5年度の県西地域活性化プロジェクトの取組

(3) 令和6年度以降の対応について

市町、民間事業者及び事務局から説明※。

(※) 小田原市、南足柄市、中井町、大井町、松田町、山北町、開成町、箱根町、真鶴町、湯河原町、株式会社ブルックスホールディングス及び事務局

○ 意見交換

小田原市長

コロナで10市町が一堂に会する機会がなかったが、私自身も他市町の取組を聞き、大変参考になったし、共通している部分と、それぞれの地域性がよく出ていると思った。特に移住と雇用は地域共通の課題かと思う。昨日、湯河原に移住した方に会ったが、小田原の方と交流されているとのことだった。小田原、湯河原、南足柄など、移住先を決めてから来る方もいるが、なんとなくこのエリア、場合によっては県境も越えて、静岡県東部から神奈川県西部くらいでいいところがないかなと探し、結果的にいい物件があったから来たみたいなの、そういう方が多いと思う。そうするとやはり、地域全体の魅力を改めて出すことの重要性を感じた。

本市にアウトドアブランドの本社が移転した。「なぜこの地域か」と聞いたところ、「このエリアにはスキー以外のあらゆるアウトドア要素がある」という答えだった。海もあれば川もあり山もあり、トレッキング、溪流釣り、海釣りもでき、スイミングもできるのでこの地域を選んだ。まさにこの地域の魅力が伝わった結果。たまたま本市にいい物件があったからだが、そういうことがどんどん起こってきているということは、この県西地域活性化プロジェクトの、一つの大きな成果だと思っている。

プロジェクトの一定の成果は着実に出てきていると感じている。広域的にやっていくという意味は本当にあったなと思う。知事にも、5月に三の丸ホール

で小田原城の見えるところでテレワークをしていただいた。その後も県西地域でテレワークをしていただいたと伺っている。そういうことも情報発信になっているかと思う。

最後に、若者をどうするかという大きなテーマで、本市も若者政策を進めていて、私も色々な方と話すが、高校生の持つ活力、ネットワーク、想像力はすごい。我々世代の時の高校生とは確実に時代が違う。このエリアの高校生は多くの方が県立高校に通っている。もちろん、それぞれの行政が単独で、地域の学校と色々やり取りをしているが、小田原市内にある学校に通っているのは小田原市民とは限らない。うまく地域と高校生とがコミュニケーションを取れる仕組みもこれからは必要なのではないか。

最後は私の個人的アイデアになる。大井高校と小田原城北工業高校を統合することについて、既に発表されているが、思い切って、高等専門学校、高専にすることも一つのアイデアではないか。大学に進む方ももちろんいるが、より早く社会に出ていくために高専を選択する方もいるのではないか。全国でも民間の高専ができるなどしている。若い人たちを地域に留まらせる、まさに知事のマグネットのように、よそから引き付けてくる可能性もあるかなと思う。

湯河原町長

高校生のパワーについて、湯河原の「多世代交流拠点」の二拠点目の中心で動いているのは高校生。一拠点目で育った小学生、中学生の子たちが今、高校生になっている。高校生だと、アルバイトとして賃金を払うことが可能なので、子どもたちに勉強を教えるなどしてくれている。湯河原には高校はないが、もちろん高校生はいる。小田原市長から高校生のパワーみたいなもの、能力があるという話があったが、私もそういう印象を持っている。今、地方創生で大学生が非常にフットワークよく動いているというような実績の積み重ねはどこにもあると思うが、県のエリアくらいなら高校生のパワーをうまく地域とつなげていくような仕組みを考えてみていただけたらと思う。

南足柄市長

県西地域の大きな資源、魅力は自然環境だと思う。南足柄も空き家対策で相当苦労しているところだが、空き家バンクに登録が42件あって、そのうち成約したのが26件。さらに、そのうち16件が市外と県外から移住してきた。未病改善の戦略的エリアとしての地域の魅力として、コロナの厳しい一面もあったが、その反面、こんなに都心から近いところで、自然環境豊かで、豊かな森林、良質で清澄な水もあり、そういうところで子育てしたいという気持ちの方が多いのだろうと、勝手ながら思っている。働く場所がある、子育て支援の環境も

良い、教育環境も良い、また、国際社会でのテーマである脱炭素社会への取組もどんどん進んでいる。こういうところで子どもの教育もしたい、育てたいということで、非常に大きなアドバンテージとなる資源があるところだと思っている。南足柄のみならず、足柄上地域、県西地域全体でそれぞれの個性や魅力が満載なので、人口が多いからいいということではなく、今は違う付加価値を求めて、皆さんがどこにしようかと思っているのではないかな。

昨年、知事にテレワークで南足柄にきてもらい、森林商社の株式会社あしがら森の会議の拠点事務所で仕事してもらった。また、児童福祉と母子保健を一体化した子育て支援拠点施設「にこっと」にも来てもらって子どもたち、親御さんたちと親しく交流してもらい、皆さん大喜びだった。

そのような、神奈川県で初めてであり、国に先駆けた政策を実現した場所が屋内にあるが、外遊びができるような公園は30~40年前にできたもので、まだリニューアルできていない。そこができれば、遊べる場がある、自然環境の中で防災の拠点にもなるということで、全てが同じベクトルに向かうのではないかなと思っている。そのような、色々な観点で、2市8町それぞれの特徴ある取組に物心両面で力をお貸しいただければありがたいと思う。

小田原箱根商工会議所会頭

外国人の目線で話したい。私は小田原市の海外市民交流会で会長をやっている。小田原市はアメリカのカリフォルニア州のチュラビスタ市と姉妹都市になってから40年になる。毎年若者の短期交換留学を4人ずつ、それぞれ2週間ずつで行っている。その関連で、コロナで事業はできなかったが、なんとかそれに代わるものをやりたいと思い、チュラビスタ市の高校とオンラインでつないで、記念事業を行った。今、チュラビスタ市の高校と小田原市の高校を姉妹高校にしてはどうかという話が盛り上がっているようだ。地元の高校生もそうだが、外国の高校生も含めたインターナショナルな高校生に、まちづくりに関わっていただくのもよいのではないかなと思った。

また、会の新しい企画として、「YOUはどうして小田原に？」というイベントをやった。住んでいる外国人同士の交流の場にもなればと思い、小田原市にいる6か国10名の在留外国人に集まってもらって、「あなたたちはどうして小田原に住んでいるのか」ということを聞いたら、「こんな素晴らしいところはない」と皆さんが言っていた。その中には、日本に来て8年で、うち6年は東京に住んでいたが、コロナで息苦しくなって、外に出たいと思い、色々探したら縁もゆかりもない小田原にたどり着いたという方もいた。その方はオランダの方で、仕事は東京で建材の商社をしており、奥様が日本人の方。この地域の素晴らしさを皆さんがおっしゃるので、色々な方にこの地域に来ていただくと

いう中で、外国人に来ていただくという視点もありだと思ふ。多くの方は奥様が旦那様が日本人なので、入りやすいのではないかと。

そのような中で、先般、日本アセアンセンターというビジネス交流をする団体から連絡をいただき、小田原・箱根を見たいということで、お迎えした。

「箱根は知っているが、小田原は知らなかった、初めて聞いた」という方々が多かった。ご案内をしたら「この地域のポテンシャルはすごい」と。アジアの色々な国がこの地域に直接的に関心を持ち始めているという感じがしている。そういう方たちも含めて、この未病を中心とした活性化に外国人を取り込んでいくという視点も大切かなと思つた。

横浜薬科大学 渡辺学長補佐

皆様のお話について、非常に感銘を受けた。何年か前に2市8町がそれぞれ頑張っているが、点が線、もしくは面にならないかとお願いをした。本日の話の中で、地方創生推進交付金やサイクルスタンプラリーなど、2市8町の、地域を超えた取組が面として盛り上がってきた。一方で今日、新たな話として人口の流入と流出の話が出た。たしかに、コロナで東京都から近隣の県に移住者が増え、東京は流出超過になった。ただ、去年はまた流入超過になり、結局、人が戻り始めた。このことは、深刻に考えなければいけないことだと思ふ。市長、町長から話があったように、アウトドア派にとっては魅力だが、果たしてそれだけで本当に人が居つくのかというのは考えるべきだと思ふ。

その中で、一つは、インターネット環境の支援がどれだけあるかが大事になる。プロバイダーや基地局の話になるかもしれないが、特に山深いところで、インターネットのつながりが悪いと不便だというのが若い人たちの考えになる。

今日の高校生の話は、すごくいい話。湯河原の多世代交流拠点の話があったが、皆、高校までは地元にいるが、大学で地元を出てしまい、そのまま帰ってこない。高校生までの間に、いかにふるさと愛を育くみ、「地元に戻ってきたい」「地元で活躍したい」という人を育てるのかということで、高専の話など、いい話がたくさん出てきた。

逆に、高校生は何を考えていて、将来どうすればこの地域が魅力的になるのか、もちろんこの場で大人たちが考えることも大事だが、次の世代の高校生やもっと下の世代が、地元愛をどう育むのかということについて、積極的に交流していくことが大事。その中では、先ほど話のあった外国人というのも一つのキーワード。「海外との交流ができるまち」などは非常に色々な魅力が出せる。

「自然が豊か」というキーワードだけだと、他にも競合する地域がたくさんあるので、なぜ県西地域なのかということになってしまう。やはり、魅力をどう作るのかはみなさんに考えていただきたい。

多世代交流をやってみて驚いたのは、大学生が高齢者を支える、支援するという奢った考えでやったが、実際に蓋を開けてみると、若者がお年寄りに励まされる、元気をもらおうという逆の効果があった。多世代交流の場が結構大事なポイントになると思う。湯河原町から県西地域においてもどんどん発展して、色々な場所に拠点があればいいと思う。先ほど湯河原町長から話があった、一拠点目で育った子が高校生になって、二拠点目で彼らが中心になって活動しているというのは、大変嬉しいこと。特に子どもの時からそういう意識をもって育った高校生が、自分たちの地域の魅力をどう発信するのか真剣に考えてくれるのであれば、色々な地域においても展開して良いのではないかと思った。

湯河原町長

今後、県で考えてもらえないかということが1点ある。移住もいいが、二拠点生活という選択肢も東京、首都圏が近いので可能性がある。その中で、学校は難しいと思うが、保育園の年齢までなら、例えば2箇所の保育園に通える仕組みや、現在の仕組みの中でそういったことができる可能性があるのかどうか、県の専門分野で研究していただきたい。一時預かりはできるとしても、現実的に週末だけ西に来ようなどといった時に、保育園にどうしても預けなければいけないということがあると思う。すぐにはできないと思うが、研究するには非常に価値がある。学校では難しいと思うが。明日明後日のことではないが、今後、生活の多様化が進む中で、県レベルで何が可能かを考えていただきたい。今日、愛知県で学校を3日間休むラーケーションという造語（注：ラーニングとバケーションを組み合わせたもの）で、自由に休みを取れる仕組みが報道されていた。そのような、県独自の仕組みを何かの機会に考えていただきたい。会の趣旨からは離れているかもしれないが、色々な話を聞きながら、ふと思いついたところ。

黒岩知事

本日は、大変貴重なご意見をいただきありがとうございました。3年にも及ぶコロナ禍で未病改善という言葉を進めてきたが、非常に困難な状況だった。食、運動、社会参加とあるが、社会参加ができない。コミュニケーションをとることは大事だが、密を避けるといったことで何もできない。運動習慣が大事と言っても、部活すら十分にできない。未病改善ということからすると、逆風の嵐だった。

その中で今日、皆さんの話を聞いて、未病コンセプトをしっかりと育て上げてくださった、磨き上げてくださったものがしっかりと根付いてきていることが確認できて非常に心強く感じた。今日、この会議室ではマスクをしているが、

もうマスクをとってもよいという時代に入り、いよいよウィズコロナ、アフターコロナの時代が始まろうとしている。ここから我々は今までできなかったことを思い切りやっていくぞという思い。

今日は、たくさんのいいキーワードやアイデアをいただいた。「高校生」という言葉がたくさん出てきた。私も非常に共感するところである。

昨日、自民党の部会から声をかけていただき、リモートで自民党本部とつないで、発表した。「神奈川県が進める高校生の未病学習」に関心を持たれて、そのことについて説明してほしいということで、部会につながった。その部会は世耕さんが仕切っており、加藤厚労大臣もいた。未病コンセプトの話から始め、ヘルスケア・ニューフロンティアの話をした。食、運動、社会参加を子どもたちの時からやっていくことが大事で、県ではミビョーマンを作り、保育園や幼稚園を回ってミビョーマンの歌を一緒に歌って踊って、未病のコンセプトを幼稚園や保育園の子どもに教えた。また、県立高校には未病を学習できる副教材を作った。私が言うのはおかしいかもしれないが、非常に良くできた教材。最初に「未病とはこういうものだ」という説明があり、「未病を改善するためになぜ社会参加が必要なのか」といった設問がある。「社会参加と未病の関係について皆で議論して書きなさい」といった設問もあり、これは、非常に深い話だと思う。そういった記述が次々とあり、みんなで議論しながら埋めていくもの。様々なページがあり、認知症や、女性にとっての未病、睡眠と未病の関係はどうかといったことが書いてあり、高校生が学べるような仕組みになっている。それらの発表をしたら、自民党の参加議員の皆様からは大変な反響だったと聞いている。未病教材を使った教育もコロナ禍で十分にできていなかったのではないかと思うので、さらにネジを巻き返していきたい。

また、SDGsという言葉は最初、なかなか認知が高まらなかったが、今はすごく認知度が上がった。私は、子どもがカギを握っていると思った。コロナ禍の前に、SDGsをテーマとして、県民との対話の広場を県庁の大会議場で行った。対話の広場には多くの高校生が来てくれ、非常にアクティブに発言をしてくれる。「私達は学校でSDGsを勉強しているが、親が知らなかった。親はどうすればいいですか」と言うので、「あなたが教えてください」という話をした。SDGsは子どもたちから広まったという受け止めをしている。リビエラSDGsアクション実行委員会というところがSDGsの作品コンテストをやってくださっているが、先日、優秀賞の表彰式があり、小学生が多くの作品を出していて、驚いた。知事賞の小学4年生の子はお菓子のメーカーに自分でアンケートを送り、「あなたたちの会社はいつプラスチックを廃止するのか」という質問をして、その結果をグラフにして発表した。フィールドワークもしっかりしているし、大学生の卒論のようで、すごいものだなと思った。その表彰式の後にフォーラ

ムのような形で話をするのだが、並んでいるのは小学生から中学生までの子どもたち。司会者が「あなたはSDGsの何番に関心がありますか」と聞くと、「私は14番です」などと答え、皆が会話しており、見ている大人の方がポカンとしている。子どもたちは機会さえ与えれば、彼らにとって自分たちの未来がかかっているということで、すごく真剣に取り組む。「私は何をすればいいのか」というアプローチで取り組む。そのため、SDGsというのがあるという間に広がったのかなと思っているところ。未病コンセプトについてもそういったアプローチをしていくことは非常に大事。

先ほど、「このエリア」という話があった。まさに、県西地域活性化プロジェクトは、「このエリア」ということで、みんなで共通の課題を見つけていこうということであったが、これまでは、大きな社会的課題を乗り越えるプロセスで、経済のエンジンを回そうと言っていた。同じように、その大きな課題を乗り越えることによって地域活性化につなげていこうといったこともあるのではないかと、今日、話を聞いていて感じた。今、一番大きな社会問題といえば、少子高齢化。少子高齢化という大きな課題があるときに、県西の持っているパワーをどうアピールするか。子どもを産みたくなるこの県西、子どもを育てるなら県西。そういうアプローチを広げていく。元気ではつらつとしている子どもたちのパワーによって、少子化を乗り越えていくモデルを作れるのではないかとということも感じた。

これから本格的に未病コンセプトを展開していく。未病つながりで他の地域と交流していく。海外でも、ベトナムとの交流はかなり深く行ってきた。関係者の方にご協力いただいて、風魔忍者のパフォーマンスをベトナムで行うなど、ベトナムと太いパイプを作ってきた。ベトナムに行って未病の話をしたらトップの指導者が大変な関心を持ってくれたので、ベトナムとのつながりの中でも、この未病というコンセプトをつないで、どんどん県西部に呼び込んでくるような、そんな流れも作っていきたいと考えているところ。

こういった会をまたしっかりとつないでいながら、県西活性化プロジェクトで大きな成果を出すために全力でやっていきたいと思うので、よろしく願います。本日はありがとうございました。

○ 閉会